

Life's Little Ironies について

宮 本 義 久

On *Life's Little Ironies*

Yoshihisa MIYAMOTO

I

Life's Little Ironies (1894) はハーディの第3番目の短篇集であり、大部分は1890-91年に書かれた7つの物語と1つの「枠組物語」から成っているが、I. ハウの '*Life's Little Ironies ... together contain most of his better stories.*'¹⁾ という評価には大方の意見が一致するところであろう。K. ブレイディはこの短篇集を 'Tragedies of Circumstance' と分類し、その 'narrative voice' は 'ironic' なスタンスを取っているとしている。²⁾

とは言え、アイローはこの短篇集の専売特許ではない。L. バトラーはハーディの4つの短篇集は大部分は 'life's little ironies' の例である、と述べている。又、H. C. ダフインの '... the whole Hardy world is founded in irony.'³⁾ とか、'His whole novel is built, primarily, upon the doctrine of the Irony of Fate, as commonly understood.'⁴⁾ という所見も正しい。R. カーペンターは、'His view is radically ironic' と述べ、ハーディの最良の物語の読後の印象として残るのは、とりわけアイロニーであるとする：

Irony above all—the incompatibility of purpose and result, the difference between the way we want things to be and the way they turn out, appearance and reality.⁶⁾

M. ミルゲイトは、ハーディは自分の短篇集がある程度の統合的まとまりを持つよう意図しているようだとし、*Life's Little Ironies* 中の物語は、多少あいまいにせよ、テーマの類似性で結びついている、と述べている。⁷⁾ H. オーレルはこの短篇集の 'more modern themes' への転回を指摘し、⁸⁾ 又、ブレイディは *Life's Little Ironies* は、当時の生活及び文学表現へのヴィクトリア朝の道徳上の因習の束縛に対するハーディの批判的態度を反影している、と説明する：

This shift to an explicit concern with contemporary problems is an expression of Hardy's tendency at the end of his fiction-writing career to question outspokenly both the social conventions of the time and the literary conventions created by and supportive of them.⁹⁾

N. ペイジは '... they (the short stories) stand in a significant relationship to the major novels written during precisely the same period'¹⁰⁾ と一般論を述べた後、その具体例として、この短篇集中の *An Imaginative Woman* をあげて、この物語の前後に書かれた小説 *The Well-Beloved* と *Jude the Obscure* に触れ、この短篇は前者からは「理想の恋人の追求」というテーマを、後者からは「異なる気質の持主たちの結婚の軌への結びつけ」というテーマを得ているようだ、としている。¹¹⁾

本小論は、アイロニー、テーマ、中心人物たちの性格などの観点から、*Life's Little Ironies* を考察するものである。

II

巻頭に掲げられている *An Imaginative Woman* (1893) のエラ・マーチミルは、不満足な結婚で孤独な生活を送る非常に感受性の強い女性であるが、彼女に残された逃げ道は空想の世界だけであった、という精神医学的とも言える状況とそのぬきさしならぬ経緯が説得力をもって物語られる。

銃器製造業の夫ウィリアムとエラは、年齢も、外見も釣り合い、生活も豊かという、外面的には申し分のない夫婦である。しかし気質の点では異なっており、最も重大なのは趣味、嗜好の違いであった：

It was to their tastes and fancies, those smallest, greatest particulars, that no common denominator could be applied. Marchimill considered his wife's likes and inclinations somewhat silly ; she considered his sordid and material. (4)

常時商売のことを考えている実際家の夫、一方 'an impressionable, palpitating creature' (4) で 'a votary of the muse' (4) の妻という内面的不釣り合いの結婚がどうして起こったのか。それは 'the necessity of getting life-leased at all cost, a cardinal virtue which all good mothers teach' (4) という社会通念上の習慣に従ったものであったにすぎないのであるが、ハーディのオブセッシブなテーマと言える不適当な結婚となったのである。エラは今や反省段階に達し、夫の鈍感さと品のなさを、又、自分自身をあわれむに至っている。

She ... since then had kept her heart alive by ... letting off her delicate and

ethereal emotions in imaginative occupations, day-dreams, and night-sighs.... (4)

日々の決まり切った家事や平凡な夫の子を生む憂うつによる沈滞の生活。‘her painfully embayed emotions’ (7) の捌け口をさがして、エラはここ 1, 2 年詩作にふけるようになっていった。

そこにハーディのお得意の「偶然の一致」、不思議なめぐり合わせ、が生じる。一家が海岸避暑地で借りた部屋が、エラがかねてからその才能に賞讃と羨望を抱いていた新進詩人トゥルーの借りている部屋だったのである。エラは一気に現実世界を忘れ、fantasy の世界にのめりこんでいく。

エラは初めはこの詩人に ‘the interest of a fellow tradesman’ (9) を持っているだけであったのが、詩人が部屋に残している事物を媒介として、彼の存在を身近に感じると共に、詩的衝動と彼の詩に対する関心は激烈に強まり、遂には詩人自身に対する恋へと転化する。

The personal element in the magnetic attraction exercised by this circumambient, unapproachable master of hers was so much stronger than the intellectual and abstract that she could not understand it. To be sure, she was surrounded noon and night by his customary environment, which literally whispered of him to her at every moment (11)

詩人とはまだ会ったこともないエラなのである。彼女を突き動かしているのは、対象を求めている感情を、手近に現れた最初のふさわしい人に向ける本能であった、と作者は説明する。

... being a woman of very living ardours, that required sustenance of some sort, they were beginning to feed on this chancing material (12)

エラは自らの心の動きに対する自覚も理解もなく、詩人へ情熱の炎を燃やす。A. ゲラードをしてこの物語を ‘a symbolic and poignant study of loneliness’¹²⁾ と呼ばしめるゆえんである。

エラは fantasy の世界では満足できず、恋する詩人に現実に出会うことが、彼女の唯一の関心事となる。

The longing to see the poet she was now distinctly in love with overpowered all other considerations. (13)

会ってどうするのかということは彼女の意識の中に現れることはない。ただ会いたいと思うのみである。

最初の会う期待は、空しく終わり、代償に借りた詩人の写真を見る前のエラは ‘something ecstatic’ (15) を待つ気持であったと説明され、実際に夜中に 1 人で写

真を見る時の1連の儀式めいた下準備は、宗教的ともいえる崇拜の念と共に、性的なものを暗示する：

To gratify her passionate curiosity she now made her preparations, first getting rid of superfluous garments and putting on her dressing-gown, then arranging a chair in front of the table and reading several pages of Trewe's tenderest utterances. Next she ... took out the likeness, and set it before her ... and she touched the cardboard with her lips. (16)

未成熟で、感情と本能に突き動かされてきたエラも、さすがにこの時初めて、そしてこの時1回きりであるが、自分の行為の不倫を自覚せざるを得ない。

She thought how wicked she was, a woman having a husband and three children, to let her mind stray to a stranger in this unconscionable manner. (16)

しかし、すぐに、会ったことはないけれども、2人は考えや感情は同じだ。彼のほうが夫より本当の自分に近いし、親密なのだ。だから他人ではないし、不倫ではないのだと、奇妙な自己弁護をして、この問題にけりをつけて、詩人の息吹きや肌のふれを感じる夢にひたりつつける。

And now her hair was dragging where his arm had lain when he secured the fugitive fancies ; she was sleeping on a poet's lips, immersed in the very essence of him, permeated by his spirit as by an ether. (17)

ちなみにこの場面について、G. ウィングは

Ella Marchmill, culturally inhibited ... is spiritually seduced¹³⁾

と解釈しているが、物語結末の 'a known but inexplicable trick of Nature' (31) との関連で考えると中々に示唆的である。

2度目には会う機会を待つのではなく、積極的に訪ねてゆくが果たせず、次の機会も期待して待つが、又、会えずじまいとなる。避暑地を引き払った後も、男性のペンネームで詩人との文通で接近を計るが物足りず、1計を案じて、彼の来訪の運びとなり、彼の現れる姿を 'ecstatically' (22) に想像しながら待つが、結局彼はやって来ない。その直後の詩人の自殺によって、彼と現実に出会う機会は永遠に絶たれる。そしてエラも憔悴し、男児出産の疲労が加わって死ぬ。ここでもアイロニーは働いている。もしエラが男性のペンネームを用いていなかったらどうなっていたか。詩人の自殺は新詩集への厳しい批評を契機に、理想の女性を得られぬための生き甲斐の喪失であった。

'... I have long dreamt such an unattainable creature ... and she, this undiscoverable, elusive one, inspired my last volume there is no real

woman behind the title. She has continued to the last unrevealed, unmet, unwon.' (25)

2人は似た者同志で、共に理想の恋人を追求したが、それは最後まで姿を見せず、会えず、手に入れられず失意の死を遂げるのである。

この短篇の最後の、最大のアイロニーは、エラの死後に見られる。彼女は死の床での告白で、詩人との関わりについて語ろうとして果たせずに死に、一方夫の方は、妻の内面にほとんど無関心であったために、このことについて質しておかなかった結果生じるのである。恋人の形見としてエラが入手し、隠していた写真と遺髪を見つけた夫は、詩人と息子は表情、毛髪の色が同一であると発見し、これを妻の不義の証と誤解し、叫ぶのである。

'... Get away, you poor little brat! You are nothing to me!' (31)

ハーディは詩人と男児との類似を 'by a known but inexplicable trick of Nature' (31) と説明し、この短篇集の序文でも 'a physical possibility that may attach to a wife of vivid imaginings, as is well known to medical practioners and other observers of such manifestations' (v) と、現実にあることである、と弁明している。ブレイディはこのような明らかに迷信であるものは、リアリスティックなこの短篇には適切でないとしている¹⁴⁾ が、ゲラードはこの短篇は fantasy をシンボリズムのレベルに高めているとし、'... a lonely wife thinks so intensely on a beloved poet that her child is born with his features'¹⁵⁾ と、これを象徴的にとらえている。いづれにせよ、ハーディの物語ではリアリズムとアンチ・リアリズムの要素の同居は、物語作者としての彼の創作方針にかかわるものであり、読者は全部を丸呑みにして受け入れる姿勢が要求される。

On the Westen Circuit (1891) はこの短篇集の5番目に置かれている物語であるが、*An Imaginative Woman* との類似性から、ここに取り上げる。ページは後者のテーマを 'a woman's attempt to find relief from an unsatisfactory marriage in fantasy'¹⁶⁾ としたが、ここでも同じことが言いうる。著作順からすれば、後者は前者のバリエーションと考えてもよいほどである。

上述のエラ同様に、'emotional' で 'impressionable' (118) な女主人公エディス・ハーナムは孤独な生活を送っているが、その原因も同じく社会通念に従って行ったがための不適合の結婚である。

Influenced by the belief of the British parent that a bad marriage with its aversions is better than free womanhood with its interests, dignity, and leisure, she had consented to marry the elderly wine-merchant – to find

afterwards that she had made a mistake. That contract had left her still a woman whose deeper nature had never been stirred. (125)

エディスは性的にも感情的にも満たされていない。草深い郷里から、アンナを呼び寄せて、メイドをさせると同時に教育を受けながら、孤独をまぎらわしている。エディスにとってのアンナは、エラにとっての詩作と同じ役割である。エラが詩作を通してその存在を知っていた詩人トゥルーの部屋を偶然借りたことが、彼女の人生の一大転機となり、彼への恋の情念を燃えあがらせることになったように、エディスの場合も、アンナが西部巡回裁判でやってきた若い弁護士チャールズ・レイに性的誘惑をうけ、無筆のアンナの恋文のゴースト・ライターの役を引き受け、レイへの恋心をいよいよ募らせることとなる。エラとちがう点は、エディスは、最初にほんの短い間、相手の男に会っていることである。

エディスの性的欲求不満は、その登場の場面から明白に示される。縁日の夜の群集の中で、アンナの手と間違えて、彼女の手袋の中の手の平に指をすべり込ませたレイを、*'very wicked and nice'* (116) と思いつつ、非常な興味を抱き、*'prepossessed, in spite of general principles, in the young man's favour'* (117) となる。彼のような *'the subtleties of love-making'* (118) を知っている首都の男と結婚しておけばよかったのに、と願うのである。

That he had been able to seduce another woman in two days was his crowning though unrecognized fascination for her as the she-animal. (125)

代筆の恋文については最初から、*'... the life, the spirit, the individuality, were Edith Harnham's.'* (124) と述べられるが、彼女は文通に *'her own impassioned and pent-up ideas'* (126) を注入する。そして、そのあとは、文通によって *'the ecstasy of fancy'* (128), *'the impassioned dream'* (136) の生活が続ける。

... mainly through the sympathies involved in playing this part, she secretly cherished a predilection, subtle and imaginative truly, but strong and absorbing. She opened each letter, read it as if intended for herself, and replied from the promptings of her own heart and no other. (128)

エディスは代筆役を演ずることでアンナとほとんど1体化しており、丁度エドモン・ロスタン作品中のシラノ・ド・ベルジュラックとロクサーヌの間のように、レイとの間に *'a magnetic reciprocity'* (125) が生じてゆく。

エラがほんの1時にせよ、夫と子のある身で会ったこともない詩人に心迷わせて、と倫理的葛藤を抱いたように、エディスはアンナの妊娠が分かった時、*'I wish his child was mine—I wish it was!'* とつぶやきながら、その願いが *'a wicked thing'* (127) という反省がある。アンナとレイの結婚が決まった後、レイのために代筆の事

実を告白すべきか、アンナのために黙っているべきかのディレンマに直面し、アンナの懇願に従うことにした時、エディスの心境は次の様に述べられる。

... yet glad, despite her conscience, that two or three outpourings still remained to her. (131)

良心よりも恋の心情を吐露する手紙を書く喜びの方が優先するのである。結婚後にアンナの無知・無筆が暴露し、代筆が発覚した時、エディスは、代筆した理由は、最初にはアンナの不幸を救おうとの親切心からであった。それをつづけたのは、‘for pleasure to myself’ (135) であったと、レイへの恋を告白する。2人は、法的にはアンナとレイは結婚したが、本当の心の結婚は自分たちの間のものだ、と認め合って、別れてゆく。

An Imaginative Woman と違って、この物語では中心人物はエディスとレイの2人である。レイがアンナに惹かれるのは、‘full of vague latter day glooms and popular melancholies’ (111) のロンドン住まいの青年が田舎娘の無邪気で幸福な姿を目にして ‘a fair product of nature’ (112), ‘a fascinating child of nature’ (120) とステレオタイプな固定観念でとらえて、‘a refreshing sensation’ (111) を抱いたからである。だから一旦誘惑が完了すると、彼にとってはそれは結局 ‘a passing desire’ (119), ‘a piece of romantic folly’ (132) にすぎない。アンナと文通をはじめるともなかつたレイに、文通を望ませたのは、エディスの代筆した予想外に魅力的な手紙であり、アンナの妊娠を知らせられて逃げ腰になったレイを感動させ、結婚に踏み切らせたのも、彼の予想を裏切る高潔な人格を示す代筆の手紙であった。

The absence of any word of reproach, the devotion to his interests, the self-sacrifice apparent in every line, all made up a nobility of character that he had never dreamt of finding in womanhood. (127)

そして思いもかけぬ利発さと心の温かさを持つアンナは、立派に大法官の妻にもなれるとまで確信するのである。

代筆の発覚後、‘You have deceived me—ruined me!’ (135) とレイはエディスを責め、‘Delighting me deceptively!’ (135) と叫ぶが、この物語は欺瞞を中心として進展して行く。ブレイディは、そもそもエディスの結婚は欺瞞的社会通念の結果であったと指摘する¹⁷⁾ が、レイはアンナを欺いて誘惑、アンナはレイを欺く代筆をエディスに依頼し、エディスは代筆はアンナのためと自分を欺きながら、自分の喜びにふけると共にレイを欺く。レイが ‘It serves me right!’ (136) と認めるように、各人はその報いを受けるのである。

欺瞞によって誘惑の責任を取らされた形のレイであるが、物語末尾のアイロニカルな場面で、不適合なこの結婚が、エディスの結婚の二の舞であることが示される。

The simple girl, upheld by the sense that she was indeed married, showed her delight at finding that he was as kind as ever after the disclosure. She did not know that before his eyes he beheld as it were a galley, in which he, the fastidious urban, was chained to work for the remainder of his life, with her, the unlettered peasant, chained to his side. (136)

For Conscience' Sake (1891) はこの短篇集の3番目に位置する物語であるが、*On the Western Circuit* と同じく誘惑にかかわる物語として、ここに取りあげるのが適当であろう。

ミルボーンは事務弁護士だった父の遺産が入って、早めに銀行勤めから引退したが、未だに独身で孤独の身をかこっている。彼には頭にこびりついていることがある。20年前、故郷の町で、ある娘に結婚の約束をして、女の子を生ませたが、彼女を捨てて、ロンドンに出たのであった。

'I ... thought at the time I had done a very clever thing in getting so easily out of an entanglement. But I have lived long enough for that promise to return to bother me' (57)

彼が楽器店の店員のその娘と結婚しなかったのは、そんなことをすれば身分が泣くと、人に言われたからであった。ミルボーンは約束を果たさぬままの自分に嫌気を感じているのである。'... it really often destroys my sense of self-respect still.' (58) と言う彼は、'my sense of being a man of honour' (59) を取り戻すために、彼女を探し出して、結婚を申し込むことで、非行を正そうという気になる。ブレイディは、'one of the most sacrosanct of Victorian tenets' は 'the duty of a man to marry the woman he has wronged' であったと述べているが¹⁸⁾、この物語は、このヴィクトリア朝の因習的行動規範のドラマタイゼーションであり、この規範がどう働くかを示すものである。

その女性レオノーラは、今は別の町に、未亡人フランクランド夫人と称して、娘のフランシスと一緒に、音楽とダンスの教師をしてかなりの収入を得て、'blameless' (61) な、人々に尊敬される生活をしていた。

'... I much desire to marry you. But it is an affair of conscience, a case of fulfilment. I promised you, and it was dishonourable of me to go away. I want to remove that sense of dishonour before I die' (63)

と自己満足、'his peace of mind' (64) だけを目的とする虫の良い申し出に、今の自立した生活を変える理由はないし、娘には父親は死んだと話してある、と迷惑がられる。昔ならいざ知らず、今更、彼の面目を立てるための償いの結婚と言われても、と

いうのである。

レオノーラの唯一の願いは、娘が恋人の副牧師のコープと結婚することであるが、コープの友人たちが母娘の職業の故に結婚に反対している—皮肉にも、20年前の結婚に対して唱えられた異議と同じである—と知ったミルボーンは、レオノーラが自分と結婚すれば、母娘はその仕事から足を洗えるし、社会的地位も向上することとなり、若い2人の結婚もうまく運ぶと説いて、母娘の承諾を取りつける。

結婚後、ヨットで船酔いした父と娘がみせた驚くべきそっくりぶり — *An Imaginative Woman* における 'a known but inexplicable trick of Nature' と同様に、これも 'inexplicable' (68) な事実と説明される—に副牧師は 'a strange pantomime of the past' (68) と読みとって疑惑を抱き、フランスから遠ざかる、という皮肉な成り行きとなる。これにより家族の中に 'the apple of discord' (69) が投ぜられ、妻は夫をはげしく責めるのである。

'Why did you come and disturb my life a second time!' she harshly asked.

'Why did you pester me with your conscience? Frances and I were doing well: the one desire of my life was that she should marry that good young man. And now the match is broken off by your cruel interference!' (70)

フランスも両親の秘密を知るに至る。ミルボーンは遂に母娘にとって、'an enemy', 'evil genius', 'an unmitigated curse' (71), 'the bringer of ill' (72) と非難され、呪われる破目となる。彼の非を改める努力は、新たな災難をもたらしたただけであったのである。彼は、安らぎも慰めもなくなり、財産を2人に与える旨の手紙を送って、ブリッセルに姿をかくす。やがて、娘と副牧師の結婚を新聞で知り、安堵する。以前は 'a bad conscience' (74) に悩んでいたのが、今度は 'heavy thought ... that by honourable observance of a rite he had obtained for himself the reward of dishonourable laxity' (74) に苦しみながら、'harmless' (74) で無口な生活へともどったと物語は終わる。

III

以上3つの物語は、社会通念に従った結婚—誘惑に伴う行動規範として要求される結婚を含めて—の悲劇を示すものであったが、次には、この短篇集の2番目の *The Son's Veto* (1891) を一瞥したい。ハーディはこれが彼の最良の短篇と語ったと伝えられる¹⁹⁾。

女主人公のソフィーは、憎からず思っている若い庭師のサムの求婚にも拘らず、20才も年上の村の牧師の後添えになる。それは牧師への愛のためでなく、尊敬のためで

あり、‘a personage so reverend and august in her eyes’ (40) の求婚を断れなかったのである。自分の身分の低さと無学から来るコンプレックスの現れであり、それ故の服従的姿勢は彼女を特徴づけるものである。

この結婚が社会的自殺と知る牧師は、ロンドンの知る人のない場末の教会に移り、やがて病死する。一流のパブリック・スクールの生徒であり、オクスフォード大学を経て聖職者になる予定の1人息子のランドルフは、母親の無教養と素性を恥じている。それは ‘his aristocratic school-knowledge’ (42) のためであり、‘a few thousand wealthy and titled people’ (43) のみが彼の興味の対象となっているのである。母親の ‘the yearning fondness that welled up and remained penned in her heart’ (43) は注ぐべき相手もなく、その生活は ‘insupportably dreary’ (43) となり、望郷の念しきりとなるが、息子の学校のことがあり、一時的感情として抑えている。時折サムのことを考えるのだったが、彼女の夫の死を知り、未だ忘れられないでいるソフィーの近くにと、ロンドンに職を得ているサムと再会するに至り、彼女は息子のほかに新たな生甲斐ができたのである。サムの求婚に対する障害は、息子の階級意識である。ソフィーにとって息子のランドルフは自分の子でなく、亡夫の預かりものという感じなのであり、亡夫にと同様に、息子に対する劣等感は強く、服従的姿勢をとる。‘... He is so much educated and I so little that I do not feel dignified enough to be his mother ...’ (48) 息子の大学卒業後のこととことわって、再婚の話を持ち出す母親に賛意を表する息子だが、相手が紳士でなく、母親の昔と同じ身分と聞くや否や、激しく泣き出して、母親に罵声を浴びせる。

‘I am ashamed of you! It will ruin me! A miserable boor! a churl! a clown!

It will degrade me in the eyes of all the gentlemen of England!’ (50)

再婚話は以後何度も持ち出され、その都度拒否される。オクスフォードの学生になった息子は、母親を十字架の前にひざまづかせ、結婚しないと誓わせる。‘I own this to my father!’ (51) と、亡父とキリスト教を自分の虚栄と偏見の支えとして利用する。

‘His education had by this time sufficiently ousted his humanity to keep him quite firm ; though his mother might have led an idyllic life with her faithful fruiterer and greengrocer, and nobody have been anything the worse in the world. (51-52)

どうしてサムに結婚承諾の意を伝えてはいけないの、とつぶやきながら、ソフィーは悲しみにやつれ、死ぬ。やっと念願かなって、故郷の村へと帰る彼女の柩が、涙を浮かべ帽子を手にした黒服のサムの果物店の前を通り過ぎる。

... from the mourning coach a young smooth-shaven priest in a high

waistcoat looked black as a cloud at the shopkeeper standing there. (52)

本来あるべき牧師の愛他的生活は眼中になく、‘a mundane ambition masquerading in a surplice’²⁰⁾ となり下がっていた若いジュード及び何千という同様な青年の存在が *Jude* の中で言及されているが、独善的・偽善的牧師たちへの反感が、この短篇でも明白に表明されている。ここでは又、ハーディ的特徴である nature 対 culture, rural 対 urban の対立が克明に描き出され、エリート教育や大都市生活の非人間性が告発されている。あるべき姿と現実の姿の皮肉な乖離が描かれているのである。

4 番目の *A Tragedy of Two Ambitions* (1888) は *The Son's Veto* と同じく法衣で変装した世俗的野心を扱ったものである。後者では牧師への敵意のみが見られたのに対し、ここでは同情も加わって、あるバランスを見せる。

ジョシュアとコーネリアスのホールバラ兄弟は独学でギリシャ語聖書と取り組んでいる。2 人を大学に行かせることを宿願とする母親は、爪で灯をとますようにして、卒業までに必要な学費を貯めた末、無理がたたって死ぬが、村の車大工で飲んだくれの父親は、その金を浪費してしまい、息子たちが大学の学位を得て出世する望みは絶たれたのである。残された道は国民学校の先生をして金を貯め、神学校に入り、さげすまれる免許状牧師になることだけである。兄弟は妹のローザを賑やかな町の学校に、後には借金して、ブリュッセルの学校に行かせる。愛するローザの自分たち以上の出世を願うからである。兄弟は村を去って師範学校に入学し、やがて兄のジョシュアは先生を経て神学校へ、弟のコーネリアスは先生と、順調に進んでゆく。2 人の ‘cursed, worthless’ (84) な父親は、時折金の無心にやって来て、2 人にとって ‘the haunting trouble’ (84), ‘that ineradicable trouble’ (84) であることをやめなかったが、遂に得体の知れないジブシー女と結婚する。ジョシュアは借金をし、父夫婦を説得してカナダへ移住させる。牧師にとって ‘this terrible vagabondage and disreputable connection’ (87) は致命的であると確信するからである。

‘... To succeed in the Church, people must believe in you, first of all, as a gentleman, secondly as a man of means, thirdly as a scholar, fourthly as a preacher, fifthly, perhaps, as a Christian, — but always first as a gentleman’ (87)

兄は村の副牧師に任命され、神学校の弟の任命も近く、妹は兄の村の若い地主との結婚の見通しもついていた折しも折、ジブシー女に去られた父親が帰国し、村へやってくる。父親は、おためごかしを言って自分をカナダに追放したと、兄弟を偽善者呼ばわりし、‘I’ll spoil your souls for preaching’ (98) と仕返しを口にし、ローザの結婚も破談にするつもりである。酒でふらつきながら地主邸に行きかける父親は堰

に落ち、兄は助けに走ろうとする弟をとめる。牧師職にかかわる身でありながら、兄弟は父親を溺死させるのである。

‘Her life and happiness, you know – Cornelius – and your reputation and mine – and our chance of rising together, all –’ (99)

やっと助けに走った時、父親の死体は見つからなかった。この出来事を兄弟は秘し、毎日死体発見の報をはらはらしながら待つ。

数カ月経ち、ローザは結婚し、ジョシュアは小さな町の牧師に、コーネリアスは兄の後釜にすわって副牧師となっているが、遂に父親の遺体は発見されるが、身元不明の溺死人として処理され、皮肉にも兄の方がその埋葬式文を読むことになる。ローザの息子のめでたい洗礼命名式に出席した兄弟の心は楽しまなかった。

Their minds were haunted by a spirit in kerseymere. (104)

父親は溺死した時、カシミヤを着用していたのだが、生前同様に死後も、兄弟に取りつくのであった。

父親の呪いの予言は実現する。ジョシュアは、大したことも望めない将来に、牧師の仕事への熱がさめ始めるのである。

‘... To tell the truth, the Church is a poor forlorn hope for people without influence, particularly when their enthusiasm begin to flag ...’ (104)

そして、自分は水車の修繕をしつづけていた方がよかったんだ、と述懐する。

兄弟の足は溺死の場に向くが、その土のなかにかくしておいた父親の杖から小さい真直な白楊の若木が伸び出していた、というのはハーディ好みのシンボリズムである。兄よりも人間味に優れているが、常に兄に引っ張られてきた弟は、毎晩父の夢を見ると言い、自分たちの聖書の勉強は、本質はつかまぬままの、結局は役に立たないものであったと反省する：

‘Ah, we read our *Hebrews* to little account, Jos! ... To have endured the cross, *despising* the shame – there lay greatness.’ (105)

疫病神の父という十字架を忍び、その恥辱をいともわないのが、牧師たる身の、聖書を体した生き方であった、と悟のである。(ちなみにこの物語のもう一つのタイトルは *The Shame of the Halboroughs* であった、と R. L. パーディは記している。²¹⁾ この場で悩みにケリをつけたいと思う、と言う弟に、兄は自分もだ、と同意する。

The Son's Veto の息子がエリート教育に毒されたように、この兄弟、特に兄の方は、時代の風潮を疑うことなく受け入れて、牧師という職業を通して立身出世を求めるという処世を行ったのである。*On the Western Circuit* には19世紀を ‘a century wherein sordid ambition is the masterpassion that seems to be taking the time-honoured place of love’ (111) という文も見られるが、ジュード同様に、彼等は環

境の犠牲者として描かれているということは言を俟たない。

6 番目の *To Please His Wife* (1891) も同じく野心から生じた悲劇の物語であるが、ここでは野心の持ち主は女性である。

ジョアナは船乗りのシェイドラック・ジョリッフと婚約したが、彼に完全に満足している訳ではない。

... she coveted the dignity of matrimony ; but she had never been deeply in love with Jolliffe. For one thing, she was ambitious, and socially his position was hardly so good as her own, and there was always the chance of an attractive woman mating considerably above her. (144)

では何故彼女は社会的地位に対する野心を実現すべく身分の上の男性との結婚をせず、身分の劣るシェイドラックと結婚することになったのか。それは、彼女にこの船乗りを奪われたライバルのエミリーが大変悲しんでいると聞いて、彼を返してやるつもりで彼女を訪問した折も折、シェイドラックがエミリーを口説いて抱擁しているのを目にして、負けぬ気の強いジョアナはすっかり気が変わったからである。これが彼女の悲劇の序章であった。「偶然の一致」のなせるわざである。

夫婦は雑貨店を開くが繁盛せず、溺愛する 2 人の息子の教育と出世について抱いていた彼女の大きい夢も細まる。反対に、エミリーは裕福な商人の後妻に望まれ、ジョリッフ夫婦のみすばらしい店の真向かいの大邸宅に住み、2 人の息子にも恵まれる。愛してもいないシェイドラックをエミリーから奪ったジョアナは貧乏くじを引き、エミリーに福を招いてやるという皮肉な結果となったのである。

ジョアナの野心的期待と現状とのギャップは、そのまま彼女の不満の大きさとなるのであるが、彼女は常にエミリーの境遇を基準にして自分の境遇を測り、ねたみ、口惜しがる：

'But see how well Emmy Lester is, who used to be so poor! Her boys will go to College, no doubt ; and think of yours — obliged to go to the Parish School!' (151)

'My boys will have to live by steering the ships that the Lesters own ; and I was once above her!' (154)

ジョアナの取り返しのつかない誤ちは、2 人の息子をエミリーの 2 人の息子に負けぬ紳士にする資金欲しさに、海の危険を知りながら、貿易の航海に夫と一緒に出掛けさせたことであり、結局 3 人の死を招くのである。夫も息子たちも、現在の生活に満足していたにも拘らず、である。彼女はエミリーにその理由を語る：

'... I could not bear that we should be only muddling on, and you so rich

and thriving!' (158)

そして作者はこれを 'the sin of making them the slaves of her ambition' (159) と説明し、彼女の野心が悲劇の原因と指摘する。

ジョアナは白髪となり、額のしわは深まり、やせて腰は曲がる。帰ってくる3人の幻聴・幻視の中を、すべてを失った絶望で次第に正気をも失ってゆく最後の姿は、正しく哀れとしか言いようはなく、深い同情を誘う。

IV

7番目の *The Fiddler of the Reels* (1893) は、音楽の持つ 'witchery' (179) についての物語である。

モップと仇名される 'un-English' (166) な容貌のヴァイオリン弾きは、感受性の強いカーラインを、その楽器のしらべで呪縛する：

Presently the aching of the heart seized her simultaneously with a wild desire to glide airily in the mazes of an infinite dance. (168)

作者は、この説明には神経科専門医が必要であろう、と言うのみである。許婚である職人のネッドは彼女に捨てられてロンドンへ行き大博覧会の仕事に従事する。カーラインもモップに捨てられ、女兒をつれてネッドと結婚する。大博覧会も終わり、帰郷途中、彼女は再びモップのヴァイオリンの魔力に踊り狂うが、その調べは彼女を神経を通して、'excruciating spasms, a sort of blissful torture' (181) を起こさせた、と性的陶醉に似たものであったとされる。そしてモップは女兒をつれていづことなく姿を消す。母親のカーラインは別に心配もしなかったが、育ての親のネッドは、あの子自分の子だ、自分には全世界だと気も狂わんばかりになって必死にさがすという、皮肉な成り行きとなる。噂では、モップと娘はアメリカに移住したということで、今は彼は70才に近く、娘は44才になっている筈だ、と話は終わる。

この物語はアメリカのある雑誌のシカゴ世界博覧会用の特別号に載せられたものであり、そのためにハーディは1851年のロンドン大博覧会を背景に利用しているのであるが²²⁾、物語冒頭からロンドン大博覧会が当時如何に世人の興味を引く大きな催し物であったかが老紳士の思い出として語られ、南ウェセックスへの鉄道の開通の話題、ネッドのする大博覧会関係の仕事、現在のモップ父娘のアメリカでの演芸人の仕事についての推量など、シカゴ万国博への配慮は顕著である。

この物語は、その執筆の時よりも40年も昔の話であるということのみならず、音楽の魔力という題材という点からも、上に扱った6つの物語とは異なっており、むしろ、長さを問題にしなければ粹組物語の *A Few Crusted Characters* の中に入れられて

もよい程である。又、この物語中にはメルストック聖歌隊への言及があることも指摘したい。

最後の *A Few Crusted Characters* (1891) は、ハーディの短篇を酷評する W. R. ラトランドをして、‘the best of Hardy’s short stories’ (219) と評させている。²³⁾ 題材がハーディの熟知するものであり、各話の語り手はウェセックスの住民であり、ハーディの最も愛する表現技法が用いられているからであるが、これこそがハーディの優れた作品に共通して見られる本質的特質であるということは定説となっていると言ってよいであろう。

11才の時にロングパドルの村から一家で海外移住したラックランドが余生を送ろうと、35年ぶりに帰国して村への乗合馬車に乗り、同乗の村人たちに昔の知人の消息をたづねることから、昔の村人たちについての思い出話しの花が咲く。

第1話の *Tony Kytes, the Arch-Deceiver* の主人公トニーは、ラックランドが同乗者たちにその消息を訪ねた人物である。語り手はトニーをよく知っていた馭者であるが、移り気のトニーは3人の村娘のうちの誰を嫁に選ぶか決め兼ねて、それぞれにプロポーズして、苦境に立つという茶番狂言である。最後には、トニーへの働き掛けの一番少ない娘がトニーを獲得するという皮肉な結果となる。

第2話の *The History of the Hardcomes* は、トニーの結婚の大祝宴に出席した教会書記が、その席にいたハードカム家の2人の従兄弟とその婚約者たちの生涯について語る。性格も好みも似た者同志がペアをなすこの2組は、祝宴の踊りに熱中し、トニーの移り気が伝染した如く、互いに相手を交換して踊るだけでなく、帰途、結婚相手も取り換えることに決める。

‘... all having been done under the hot excitement of that evening’s dancing.’
(207)

7番目の物語のヴァイオリンの魔力の及ばず影響を思い出させる。結婚後、彼等は相手交換を後悔するようになる。4人で遠出して、好みを同じくする婚約時代のペアになって、散歩とボート遊びに分かれ、ボート組は溺死体で発見される。

It was said that they had been found tightly locked in each other’s arms, his lips upon hers, their features still rapt in the same calm and dream-like repose (214)

そしてこんな死は彼等の運命だったのだ、と途中から語り手を交代した副牧師は語る。残る2人は幸福な結婚生活の後死ぬが、ウィリアム・プリヴェットが2人の臨時雇いをしていたという話から、話題は彼の死へと移る。

第3話 *The Superstitious Man’s Story* の語り手は種屋の父親で、この大の迷信

家はウィリアムの死んだ時に見られたいくつかの不思議な迷信的現象を宿命論的に語る。

第4話の *Andrey Satchel and the Parson and Clerk* は屋根ふきの親方が語る。主人公の牧師は他人の飲酒には厳しいが自分のには甘く、生き物への慈悲を説きながら狐狩りに目がなく、約束した結婚式を行う義務を忘れて狩に熱中する。他人の罰当たりの言葉をたしなめながら自分もそんな言葉を口にする、といった偽善ぶりが滑稽に揶揄される。この牧師がおくればせながら挙行してやる結婚式の花嫁のジェーンは妊娠していて、年下の花婿アンドレーの気が変わらぬうちにと式を急いでいるのであるが、

‘... what Jane got for her pains was no great bargain after all. ’Tis true she saved her name.’ (230)

という語り手の結びの言葉は、いかにもハーディらしい皮肉ぶりであり、*On the Western Circuit* のアンナを思い出させる。

第5話は *Old Andrey's Experience as a Musician* で、学校の先生が少年聖歌隊員時代の経験談である。上記のアンドレーの父親がヴァイオリン弾きのふりをして地主邸でクリスマスの御馳走にありつこうと謀るがばれて、地主に住居の空渡しを命じられるが、奥方の取りなしで許されたという話である。この聖歌隊がオルガンに取って代わられる話しがつづいて語られるが、この新旧交代は *Under the Greenwood Tree* (1872) のテーマの一つであり、又、ハーディの祖父と父も聖歌隊でヴァイオリンを弾いていたという事実もある。

第6話の *Absent-Mindedness in a Parish Choir* は再度屋根ふきの親方が語り手となるが、聖歌隊の楽士たちはクリスマス期で毎晩の演奏で睡眠不足の上、寒さしのぎにこっそり飲んだ酒で眠ってしまい、怒った牧師と地主にお払い箱にされ、下戸のオルガン奏者がその座につくのである。

第7話の *The Winters and the Palmleys* では、美貌を競っていた2人の女性の1方が他方の恋人を横取りし、その上、宝物とする子供をも死なせる次第となり、2重の恨みを抱く女性の方が、相手の息子を絞首刑に追い込むという復讐の物語で、語り手の食料雑貨店主の老女は幼い頃にこの葬式に行った経験があるのである。家宅侵入と意図せざる数ギニーの金の持ち出し、当時はそれで死刑であったのである。

第8話 *Incident in the Life of Mr. George Crookhill* では上の死刑の話しに誘われて、登記係がジョージといういかかわし男の ‘a case of the biter bit’ (246) の話をする。身なりも乗馬も立派な男に接近して、まんまとその服と馬を頂戴して逃げ出したジョージだったが、実は相手は一方的な軍法会議で銃殺刑を言い渡される筈の脱走兵で、ある農場主からその服と馬を騙し取っていたのであり、今はジョージの古服

とみすばらしい馬で、巡査につかまっているジョージの前を悠々と立ち去る。人違いと判明したジョージは微罪ですんだ。*The Three Strangers* の脱獄囚を思い出させる後半である。

最後の話は *Netty Sargent's Copyhold* で、村内だけでは安くながらその風景画が売れている画家の語る話である。謄本所有権の更新手続を期限内に済ませないままに死んだ叔父の土地・家屋を強欲な地主に没収されそうになったネティは、叔父が生きているように巧妙に工夫して、更新手続きに成功し、その不動産が無いネティとは結婚しないと宣言していた恋人との結婚という究極の目的を達成する。しかし夫はやがて妻を打つようになり、ネティは結婚するための苦労を後悔していると、近所の人々にもらすようになるという皮肉な話である。

乗客の話はすべて終わったところで馬車は村に着き、村人たちは次々と降りる。月光の中を、子供の頃なじんだ場所を訪れるラックランドに、海外にいた時の彼の想像の世界の中であれほどに持っていた魅力は、目前の現実の姿には失われていた：

The peculiar charm attaching to an old village in an old country, as seen by the eyes of an absolute foreigner, was lowered in his case by magnified expectations from infantine memories. (259)

やがて教会の墓地の墓標を読むに至って、彼は自分が35年前に後にした村の人々の中にいるのだと感じる。馬車で話題に上がった人々を初め、その他の名を覚えている人々は皆、鬼籍に入っていた。彼はデラシネとなっていたのである。

Time had not condescended to wait his pleasure, nor local life his greeting. (259)

彼は余生を村で送る期待の甘さに気づき、村を永遠に去ったが、それから10数年になる。

A Few Crusted Characters の主人公達は皆 'crusted' で、語られる思い出話はハーディの短篇創作の態度に則って 'ordinary' なものでなく 'remarkable' (252) なものである。そして、これらの話の集録・配列にはある統一性が読み取られるように思われる。第1話の茶番狂言のプロポーズの話に始まり、第2話の、前話と同じような軽卒な結婚から生じる悲劇的死、第3話では薄気味悪い1連の予兆を伴う死とつづき、第4話以下の3話では、共同体内の階級が存在が取り上げられる。即ち、第4話では結婚式を司る牧師が滑稽に描かれ、第5話は村人の住居を取り上げる権力を持つ厳しい地主と慈悲心あるその妻とのバランスが、第6話では村の伝統の聖歌隊を解散させる地主と牧師。(但し、第4・5話はサッチェル親子にかかる話であり、第5・6話はクリスマスの聖歌隊とかかわっている。) 第7話は復讐の話であるが、この復讐を

残酷ならしめたのは、微罪を死刑とする法という国家権威である。第8話は軍法という国家権威相手の、第9話は贍本保有権の法手続きに関する地主相手の、共にだましのトリックで、生命と財産を守るのである。

この枠組物語は、各話配置の統一原理探しは別として、滑稽でユーモラスなものが大半を占めるが、深刻なものも一部加わった、「ウェックスのある村の過ぎ去った生活のパノラマである。」²⁴⁾ 滑稽にせよ、深刻にせよ、これらの思い出話を特徴づけるのは、語り手たちの、炉辺での昔話の語りを思わせる、くだけた口語体の語り方である。そして時折聞かれる、当時はああった、こうだったという、現在の状態と比較する言葉と共に、ノスタルジーを感じ取らせ、この枠組物語に ‘an elegiac framework’²⁵⁾ を与えているのである。

V

Life's Little Ironies の中でアイロニーがどのように用いられているかを、各物語の梗概の中で、ほんの一部の、大掛かりな例ながら示した。しばしば偶然の出来事が発生して、目的・期待は裏目に出るし、又、見掛けは実体と異なるのであり、ハーディの見方は根本的にアイロニカルであり、その世界はアイロニーに基づいて築かれた世界と言い得るほどである。

テーマの点から見ると、*An Imaginative Woman* と *On the Western Circuit* に見られたように、まず結婚に関わるものがある。不適合の結婚から生じる感情的・性的欲求不満のために、各々の女主人公は、そのはけ口の対象を求めて、会ったこともない、或いは、1度1寸だけ見ただけの男性に、馮かれたように、1人相撲の恋の情念を燃やす。又、*For Conscience' Sake* の場合のように、過去の過ちの単なる償いとしての結婚も、結果は不幸でしかない。そしていずれの場合も、過った社会通念が原因である。

もう一つのテーマは野心、特に階級的野心と、それと表裏の関係にある階級的偏見である。*The Son's Veto* のように、他者のみを不幸にする場合もあれば、*A Tragedy of Two Ambitions* や *To Please his Wife* のように、自他の不幸を引き起こす場合もある。*The Fiddler of the Reels* に関して言えば、むしろ、*A Few Crusted Characters* の系列に属するものとする方が適當であると考えられるが、その理由は上述した。

ハーディは作品のプロットのあり方について次の様に述べている：

A Plot, or Tragedy, should arise from the gradual closing in of a situation that comes of ordinary human passions, prejudices, and ambitions, by

reason of the characters taking no trouble to ward off the disastrous events produced by the said passions, prejudices, and ambitions.²⁶⁾

この考え方はそのまま上記の情念、野心、偏見の物語のプロットに当てはまる。男・女の主人公は、これらの情念、野心、偏見が自他に悲劇を惹起するまで、それらに押し流されて行くが、その過程で他者がこの成り行きを介入することはまずない。他者は主人公たちの行動に無関心か、介入して葛藤を生じせしめるだけの強い個性の人物ではあり得ないような性格づけがなされているのである。作者の関心はこれら情念、野心、偏見から生じる劇的対立よりも、それらの独走による悲劇的結末を描いて見せることにあると思われる。ハーディはよくジョージ・エリオットと、作中人物の倫理的選択の有無の点で、比較される。ハーディの人物たちは、倫理的存在としてより、自然的本能又は社会の諸制度の通念という環境の犠牲者として描かれているのであり、根本的には同情されるべき存在なのである。良くも悪くも、それがハーディの描く世界であり、*Life's Little Ironies* はそれを典型的に示すものである。

註

(Text は Macmillan の The Greenwood Edition を使用)

- 1) Irving Howe, *Thomas Hardy* (London : Weidenfeld & Nicolson, 1968), P. 75
- 2) Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* (London : Macmillan, 1982), P. 95
- 3) Lance St John Butler, *Thomas Hardy* (Cambridge : Cambridge University Press, 1978), P. 158
- 4) H. C. Duffin, *Thomas Hardy* (Manchester : Manchester University Press, 1937), P. 166
- 5) Ibid., P. 184
- 6) Richard Carpenter, *Thomas Hardy* (New York : Twayne Publishers, 1964), PP.69-70
- 7) Michael Millgate, *Thomas Hardy : His Career as a Novelist* (London : The Bodley Head, 1971), P. 263
- 8) Harold Orel, *The Victorian Short Story* (Cambridge : Cambridge University Press, 1986), P. 112
- 9) K. Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy*, P. 95
- 10) Norman Page, *Thomas Hardy* (London : Routledge & Kegan Paul, 1977), P. 122
- 11) Ibid., P.129
- 12) Albert J. Guerard, *Thomas Hardy* (A New Directions Paperback, 1964), P. 107
- 13) George Wing, *Hardy* (London : Oliver & Boyd, 1963), P. 27
- 14) K. Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy*, P. 103
- 15) A. J. Guerard, *Thomas Hardy*, P. 107
- 16) N. Page, *Thomas Hardy*, P. 129
- 17) K. Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy*, P. 127
- 18) Ibid., P. 109
- 19) J. I. M. Stewart, *Thomas Hardy : A Critical Biography* (London : Longman, 1971), P. 151
- 20) *Jude the Obscure*, P. 153
- 21) Richard Little Purdy, *Thomas Hardy : A Bibliographical Study* (London : Oxford

University Press, 1954), P. 83

22) Ibid., P. 82

23) William R. Rutland, *Thomas Hardy : A Study of his Writings and their Background* (Oxford : Basil Blackwell, 1936), P. 219

24) Dale Kramer (ed.), *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy* (London : Macmillan, 1979), P. 169

25) Douglas Brown, *Thomas Hardy* (London : Longman, 1954), P. 116

26) Florence Emily Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London : Macmillan, 1962), P. 120.

(1996年 4 月30日受理)